

## 防災教育チャレンジプラン ワークショップ 発表原稿 高知県立高知東高等学校の防災教育の取り組み この1年

高知東高校の谷内と申します。よろしくお願ひいたします。午前中の発表を聞きながら、昨年のこの時期に、3分間のプラン発表をしてから1年がたったことを実感し、時の過ぎる早さを感じております。

来年度の実践団体のみなさんにエールを送ります。

さて、全国では、近年、自然災害により多くの被害が発生しています。高知県でも、毎年のように、台風などの風水害に遭っていますが、地震災害は南海地震の発生周期でしか起こらないと言っても過言ではなく、この先30年間の発生確率が50%と言われる中でも、その備えは十分とは言えません。

この1年、「防災教育チャレンジプラン」の実践団体として、プランタイトル「南海地震に備えて～より行動できる人になろう～」を掲げ、取り組みをすすめてきました。

直接、被災地震の経験のない地域での実践ですし、本格的に防災教育をはじめたばかりであり、稚拙な部分もあるかと思いますが、報告させていただきます。お手元のパンフレット23ページや、成果物としてのB4版のもえぎ色の表紙の冊子、うしろに掲示してあります壁新聞をご参照下さい。

本校は、総合学科と5年一貫の看護科を併設する、生徒数約800名の全日制高校です。今回の取り組みに当たり、校内組織に管理職を含めて10名の「地震防災プロジェクト委員会」を設けて取り組みをすすめてきました。

この1年間の取り組みはこの表の通りです。赤字が、当初の「防災教育チャレンジプラン」の計画です。学校現場は、教育効果をあげるため、ひとつひとつの取り組みの目的を明らかにし、

それぞれを有機的につなげた取り組みが行われます。

計画を補強したり、効果的に行うために、結果的に防災教育にかかわる取り組みがこのようになりました。限られた時間の中で、全てを詳しくお話することはできませんので、重なる部分もありますが、取り組みを特色別に分類して発表させていただきます。

### まず、総合学科の特色を活かした取り組みです。

総合学科の授業は、生徒ひとりひとりの個性に応じて、多くの科目の中から選択できます。その選択科目の中に、今年度から「地震列島と私たち」という科目を開講しました。初年度ということもあり、2年生2人だけの授業でしたが、系統的・継続的に学ぶことができました。

来年度は2・3年生で約45名が学ぶ予定です。(2年生8名、3年生17+20名)

また、必修科目である、自己の在り方・生き方について考える「産業社会と人間」という1年次生で週2時間の授業を活用し、地震防災学習プログラムとして、講演会、寝室チェック、地震防災体験と継続したメニューを実施し、12月の防災避難訓練に臨みました。取り組み直後のアンケートでは、地震への備えについて家族で話し合った者が16%と低い数字ですが、自分自身の地震への備え、あるいは備えようとしている者は57%と、意識の高揚につながりました。

**次に、仲間を意味する「ピア」の観点を取り入れた取り組みです。**

高知大学自然環境科学科の大学院生・大学生をアドバイザーに迎えての「自分の寝室チェック」。

全国で唯一「環境防災科」を設置している兵庫県立舞子高校とのワークショップ・フィールドワークを通しての交流。

本校の看護科3年生が総合学科1年生に、包帯の巻き方や三角巾の使い方を教える「応急手当の方法を学ぼう」の実習。

これらは、大人が教え込む場合と異なり、年齢の近い者どうしが一緒に考え、楽しく学びあうことにより、より効果的な学習ができました。それぞれの取り組みのリーダーの存在は、大変重要でした。

**次に、防災体験の取り組みです。**

徳島県立防災センターでの様々な災害の模擬体験。

先ほど紹介した「地震防災学習プログラム」の中の取り組みである、ロープの結索法・けが人の搬送法・重量物の持ち上げ法の3つを、オリエンテーリング形式での体験。

体育祭での競技種目としてのバケツリレー。

まずはやってみる、体験してみることで、随分、災害や防災に対する認識が変わりました。近年の自然災害の報道を、自分のこととして見るできるようになった生徒もいます。

**次に想像力を豊かにする取り組みです。**

直接経験がない中で、イメージづくりを行うことは困難な面もありますが、防災教育をすすめる上では、大変重要な活動です。想像力を豊かにすることが、判断力を養い、行動にもつながります。

高知県では昨年1月に、将来の南海地震の参考とするため、スマトラ沖地震津波の被災地であるスリランカに調査団を派遣しました。その時の写真をお借りしたものと、「地震列島や私たち」や「地学」の授業で制作したものを展示するとともに、津波の高さをイメージしてもらうため、校舎の壁面を利用して、縄ばしご形式のスケールを作成しました。生活の中では「距離」は意識しても、「高さ」を意識する機会が少ないので、スケールを校舎の壁に直接ペイントすれば、より効果的であろうかと思われます。本校では現在、校舎修繕のため足場が組まれていますので、その実施を準備しています。この取り組みは、まだ自主防災組織が作られていない地元町内会や近隣の小中学校、ひろく一般にも案内をして取り組みました。

自分の命を守る視点で、1日の3分の1から4分の1を過ごす「寝室」での家具の配置などを事前に記入して、当日は大学院生と一緒に危険な家具などをチェックして、今後の対策を考えました。

教職員の防災研修会では、防災ゲームの手法の一つである「クロスロード」を実施しました。阪神淡路大震災の教訓をもとに、ジレンマを問題にして「YES・NO」で答え、討論するものです。独自に学校現場用のオリジナル問題も作成して、写真のように、会場の雰囲気も良く大変盛り上がりました。アンケートでは、研修効果も高く、また本校の生徒にもできそうという意見が多く、今後も研究を続けたいと思います。

昭和の南海地震が起こった12月には、はじめて地震に特化した防災避難誘導訓練を行いました。授業中に地震が起きた場合、授業に出ている教員の稼働率は本校では36%～79%で、これまでのような役割分担で人を固定しての訓練では現実的ではない。火災と違い、広範囲の状況把握が必要であるとの観点から、これまでの訓練を大幅に見直し、画面のような工夫をして実施しました。

前々日に行った「クロスロード」を使った校内研修会の成果もあり、より現実的な訓練ができましたが、何よりも、多くの課題が明らかになったことが収穫でした。今後も改善をはかり工夫しながら、現実的な避難誘導訓練を実施したいと思います。

以上が、今年度の主な取り組みです。

これらの取り組みの経過や成果・課題を率直に公開し、立ち後れている本県高校での防災教育の参考にもしてもらうために、お手元にある冊子を作成し、現在、管理職を通して直接配布をしているところです。すべての取り組みを紹介したものではなく、各学校や授業で使えるようなものを一般化しました。ワークシートは、まだいくつか掲載できるものがあつたのですが、締め切りの関係でこの内容にとどまりました。表紙に防災教育チャレンジプランのロゴや名前を出すことが恥ずかしい内容ですが、のちほどご意見を聞かせていただければ幸

いです。

これらの取り組みの成果は、本日のパンフレットや先ほど紹介した冊子に記していますが、次のような点があげられます。

生徒・教職員の地震防災に対する意識の向上とともに、その対策の具体化が進みました。

様々な取り組みを通して、現実に照らして様々な課題が明らかとなり、改善点や今後の方向性が見えてきました。

組織的に、防災教育の取り組みや災害時の対応について具体的に論議することができました。

地元高知大学をはじめ、高知県危機管理課・高知市消防局など多くの団体・個人と連携した取り組みができたことは、今後活かせる財産となりました。

また、取り組みを通して感じたことは、次のような点です。

すでに先進的に行われている実践校の報告でもあるように、学校現場では、各教科やロングホームなどの活動の中での「特別でない防災教育」の取り組み、そしてそれらが、小・中・高校をとおした継続性と、ひとつひとつの取り組みのつながりの大切さが指摘できます。

また、災害時は「共助」の視点が強調されているように、日常の教育活動を基礎にしながら、生徒どうしが支え合える人間関係、信頼関係づくりが必要であること。そのためには、リーダーの存在が不可欠です。本校でも、「地震列島と私たち」の受講生や「生徒会の委員会活動」を見直し、毎年、少しずつでも、育てていこうと思います。

さらに、近年の自然災害の中で生まれた教訓を教材化していく取り組みの重要性です。高知県でも、津波の被害ばかりでなく、山津波 つまり新潟中越地震と同じ状況も予想されています。今後は、このような観点を持ち、本校の特色も活かしながら、教科やLHRなどでもできる防災教育の教材化、取り組みをすすめていきたいと思っています。

最後になりましたが、これらの取り組みにご協力いただいた、防災教育チャレンジプラン実行委員会や実践団体のみなさんをはじめ、多くの方々のご協力に感謝いたします。

明日おきてもおかしくはない南海地震ですが、今回の「防災教育チャレンジプラン」の取り組みを基礎に、今後もこつこつと取り組みを積み重ね、そのことを現実として活かすことができる生徒の育成を目指し、奮闘する決意を述べ、発表を終わらせていただきます。

ご静聴、ありがとうございました。